

「ほら、もっと動かすんだ」

「気持ちよくなりたいだろう？」

男たちの卑しい<sup>いや</sup>声色が、夢の中のような奇妙な反響をともなっている。

少年は熱に浮かされたように、男達に促されるまま男の腹に手をつき、みずからの腰を肉杭から引き抜く。

「う…♡うう……っ♡」

しかし力の抜けた下半身ではうまく踏ん張りがきかず、幹の半ばまでもいかぬうち力尽き、

「あ” あッ！♡♡♡」

内壁にぬめる肉棒に思いきり腰を落とし、この世の終わりのような快感が結合部からぶち上がる。一瞬意識が飛んだのではと思うほどの刺激に、汗みずくの下半身が滑稽なほどに痙攣した。

「もう一度だ」

「ああ…っ♡いや…いやあ…っ」

今の刺激ですっかり腰が抜け、動けなくなった少年の腰を再び背後の男が掴み、引き上げる。男に掴まれた腰骨からすらジンジンとした疼きを感じるのに、ずるずると強制的に粘膜から幹を引き抜かれ、悶絶しそうな快感に身をよじる。そうして完全に抜け切る直前でぱっと手を離され、

「アああ…っ！！！！♡♡♡♡♡」

ストンと腰が落ちると同時に、また壮絶な快感が孔から脳天まで打ちあがる。びりびりと髪や指の先まで濃密に痺れ、全身が発作のように痙攣する。

「ひ…っ！？♡ああ…♡♡ああ…っ！！♡♡」

かと思えばぬるり、とした感触が胸を襲い、なかの男を締め付けながら跳びあがりそうになった。

見れば両の乳首をれろれろと左右の男の舌に舐められている。

「あああ…っ♡ああ…っ♡♡だめ…え…っ、！」

皮膚という皮膚が過敏になった今、こうして神経の集中した場所を熱くぬめった

舌でつつきまわされるのは地獄だった。それらの刺激に呼応するように、深々と  
啜えこまされた肉杭にきゅうきゅう内壁が絡みつくのも堪らない。

「ん” うツツ！♡♡♡あああ…ツ！♡♡」

そうして身をくねらせていると、深く結合したままの腰を前後に揺さぶられ、なか  
で男と擦れ合わされてますます下半身を、躰の芯を悩ましくさせられる。

「ひい…っ♡♡♡ん” う…ツ♡あ♡、ああ…ツ♡♡♡」

何度も腰を揺すられながら、両乳首を舌先でつつかれ<sup>なぶ</sup>られ、腰やへそ周り、  
震える太腿に、男達の手や、それから熱い肉棒を突きつけられる。

もはやどこをどう扱われても気持ちよく、頭の中が溶けそうな悦楽に堕ちていく。

(だ……だめ……こんなの……)

つらくて気持ち悪くて仕方がなかったはずの行為に、熱っぽく酔いしれている自  
分がいる。先程飲まされたたった数口の酒のせいで、自分の躰というのはこんな  
にも<sup>みだ</sup>妄りがましいものになってしまうのか——。そう思うとショックで仕方がないのに、  
それを上回る快感が次々と襲い来るうち、頭がぼうっとして、何も考えられなくな  
っていく。